

“「人新世」のはじまり”という視座：令和 5 年を迎えて

新しい年を迎えたのですから、夢のある話から始めようか、と思っていたのですが、この厳しい世界情勢を考えますと、あまり悠長に構えてはられないのではないかとこの思いから、皆様と危機意識を共有したいと思い、表題のようになってしまいました。

実はこのような思いに駆られましたのは、11 月の末に、学士會会報 No. 955(2022, IV) で「人新世の環境危機と二十一世紀のコミュニズム」（東京大学・斎藤幸平准教授）という講演要旨を読んでちょっとした衝撃を受けて以来考え続けていたためでした。その講演の趣旨は、コロナ禍も気候変動もあくなき経済成長を求める資本主義がもたらしたもので、慢性化する気候危機を克服するためには、「脱成長」へ舵を切るべきである、というものでした。新鮮な驚きを覚えましたので、直後に、若い友人（元同僚）に意見を求めるためにメールを送ったところ、「それって 2 年前から話題になっていてネット上で色々物議をかもしていますよ」といって、斎藤幸平著「人新世の「資本論」」（集英社新書、2020）を紹介してくれました。早速購入して読んだところ、瞠目してしまいました。特に、見開きに、“SDGs は「大衆のアヘン」である”とあるのを見て、“物議を醸すのは当然だな”と思いました。ただ内容はすらすら読めて納得させられました。だからと言って洗脳されたわけではありませんのでご安心ください。この驚きは久しぶりで、佐和隆光著「グリーン資本主義」（岩波新書、2009）を読んで以来のことです。

このことを、12 月 15 日の“E&E セミナー 2022”（3 日目）の総括の際に問題提起させて頂きました。また、法人会員・東京インキ(株)様の清川伸夫氏と年末に懇談する機会がありましたが、話がここに至りました。そのときに、斎藤幸平著「大洪水の前に～マルクスと惑星の物質代謝～」（原著はドイツ語で著者本人が邦訳、角川ソフィア文庫、2022）も一緒に読みましょう、ということになりましたので、早速購入して年末年始に読んでみましたが、こちらは結構手ごわく難解でまだ読み切れていません。

さらに、このようなことは、これからの若い人にぜひ考えてほしい、という思いから、昨年末の 12 月 23 日に元在職していた研究室の学生さん（15 名くらい）に、OB 教員講話として、“大事にして来たもの：常識を疑うことと挑戦すること”と題するお話をさせて頂いた機会にも“クリスマスメッセージ”として“脱成長”の話を紹介させて頂きました。ただ、理解してもらえたかどうかは、定かではありません。その時の学生さんからの質問は「前向きに取り組むきっかけは何でしたか」とか「今取り組んでいる研究は何ですか」など、やはり現実的でした。

斎藤幸平博士のような新しい視点からの提言には、やはり、批判も多いようですので、批判本のひとつ、柿埜慎吾著「自由と成長の経済学 「人新世」と「脱成長」コミュニズムの罫」（PHP 新書、2022）を読んでみました。批判の内容は良く理解できたのですが、論調がややヒステリックのうえ、“では、われわれはどうすればいいのか？”という提案がないのは残念でした。

このような思いに“もやもや”しながら年末年始を過ごしていましたが、TV などでは、“岐路に立つ資本主義”などの言葉が目についてグローバルな課題だと再認識させられました。さらには、資本主義とともに、民主主義も今のままでのままでの存在意義も問われていて、もしかしたら資本主義よりも深刻かもし

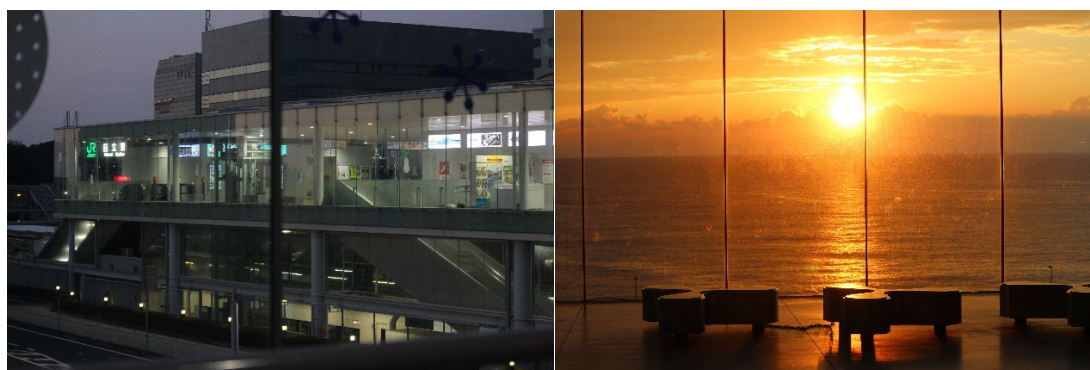
れません。そうこうしているうちに、1月9日の午後のNHK TV BSで、ハーバード大学のマイケル・サンデル教授の「白熱教室」（2022.6.4放送分の再放送）を久しぶりに見ましたが、そのタイトルが「中国って民主主義国?」というものでした。米国、中国と日本の若い方々の討論を通じて、民主主義にもいろいろあることを知らされて驚きました。

一方、我々が主たる活動の舞台としている建設産業界に目を向けてみますと、少々不安にかられます。1月のある日、某所で建設関連団体の賀詞交換会があり、乞われて出席しましたが、岐路に立っている資本主義や民主主義の現状をどうとらえ、どのような方向に進もうとしているかを確認できませんでした。筆者の不安の一つは、かつての“列島改造論”と今の“国土強靱化論”のどこに違いがあるのでしょうか?という問いに対して明確な答えが用意できていない、というところにあります。

人や組織は岐路に立たされた時どうするのでしょうか?ほとんどの人や組織は、このように問いかけると、“前に進む”と答えるでしょうが、方向性が不確実の今、立ち止まって考えることがもう一つの選択肢です。最後のひとつは、後戻りすることですが、ほとんどの人や組織はできないでしょうし抵抗があるでしょう。

こういう時代に必要なことは何でしょうか?個人的には、“覚悟”であると考えています。行先短い筆者が言うのはおこがましいのですが、“どんな時代になっても生き延びてやる”という覚悟が求められていると思っています。そのことを昨年12月23日に若い学生さんへの講話の最後のメッセージとして送りました。

さて、われわれ LRRI は、どういう覚悟を持って、“利他”と“自他共栄”を実現していけばよいのでしょうか?できるだけ早い時期に、ぜひ、会員の皆様と議論をする機会を持ちたいと願っております。



(世界で最も美しい駅の一つと言われる JR 日立駅にて、令和5年元旦)

【注】人新世（ひとしんせい、あるいは、じんしんせい）：国際地質科学連合（IUGS）が是非を議論している、“環境危機の時代”を象徴する学術用語。我が国では、大分県沖・別府湾で検証のための調査が行なわれている（読売新聞、令和4年11月27日朝刊による）。

“元旦の 朝日を浴びて この覚悟  
超えてみせるぞ 八十の壁”  
“雲間から 今年も見たぞ 初日の出  
八十の壁 目前にして”  
(安原一哉、代表理事)